

Title	観光開発に見る「民族文化」の表象： 中国貴州省雷山県の「苗年文化節」をめぐって
Sub Title	The representation of "Ethnic culture" in tourism development : case of "New year cultural festival of Miao" in Leishan of Guizhou province, China
Author	陶, 冶(Tao, Ye)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.69 (2010. ) ,p.117- 129
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000069-0117">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000069-0117</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 観光開発に見る「民族文化」の表象

—中国貴州省雷山県の「苗年文化節」をめぐる—

### The Representation of “Ethnic Culture” in Tourism Development —Case of “New Year Cultural Festival of Miao” in Leishan of Guizhou Province, China—

陶 冶\*

*Tao Ye*

In this paper, the representation of the “Ethnic Culture” (*Minzu Wenhua*) is studied in the relationship mainly between the state and local area, or towns and rural society in the perspective on the tourism development flourishing in ethnic minority areas in southwest China in recent years. The main research are conducted to be focused upon the case of “New Year Cultural Festival of Miao” after the age of 2000, sponsored by the Leishan provincial government in Guizhou Province.

Specifically, some items of the “Cultural Festival” held at Leishan town are analyzed under the point of view on cultural reproduction. The items in the festival demonstrate the dynamic changes of the traditional elements, which include the ancestor worship and purification ceremony in the rural area, and furthermore transformation of the cultural position of the traditional elements in Miao society. This festival starts by the big parade and opening ceremony in Leishan town and encompass the normal new year ritual held in some tourism spots of traditional village, so that the each village become a passive position to the town under the governmental control. “Cultural Festival” consists of modern and traditional elements such as the exhibition of fine arts, folk performance, ethnic dance, running race competition, competition of songs, village rituals, buffalo race and so on. After the intervention of local government, cultural factors of villages are not only recreated or invented, but also “demonstrated” and “appropriated” by the peoples in these competitive events. The traditional organization has been taken place by the governmental administration. “Ethnic Culture” (*Minzu Wenhua*) has been transmitted and shown by the various kinds of representation, and new forms of culture has been invented through display and demonstration. But, the result of such upheaval situation causes the unbalance between towns and rural areas under the economic influence by tourism development, as make us to think about that whose “Ethnic Culture” is.

---

\* 法政大学国際文化学部外国人客員研究員

## 1. はじめに

中国南西部では、1980年代後半から始まった民族観光の事業は、2000年より発足した国家の「西部大開発」<sup>1)</sup>の政策の実施と、「国際観光年」の催しをきっかけに、多くの地域で少数民族地区の経済を開発する主要な手段となってきた。この地域では、もともと大規模な工業の開発を行うために必要な資本や人材が不足し、交通の整備も遅れていたため、少数民族の生活や文化的事象を資源とする「民族観光」によって、貧困の救済と地域の振興につなげることが期待された。観光開発のブームの中で、「民族文化村」や民族英雄の彫像が建てられた広場や、民族の伝統的祭日は、多くの場合は「民族文化」(Ethnic Culture)の名の下に、観光開発の項目となった。しかし、このような国家政策の主導による「民族観光」が、地域においては、町と村落、諸民族の役人や知識人などのエリートと村人の間、村落や各民族の下部集団(支系)の間で、様々な問題や複雑な関係を引き起こしている。

本論文では、中国南西部の少数民族の地域で近年に盛んになった観光開発に関して、貴州省雷山県の地方政府が主催する「苗年文化節」を事例として、従来の中国に関する人類学研究における「国家」と「民間社会」の分析枠を現地文脈に即して検討し、国家と町と村落の相互の関係性の中で、展開される「民族文化」の表象(representation)の動態の諸相を考察する。

## II. 自己表象としての「民族文化」: 町における「苗年文化節」

### 1. 「苗年文化節」の由来と関連する論争

雷山県は中国貴州省黔东南苗族侗族自治州の南西部に位置し、2006年時に登録した常住の人口は15.28万、そのうち農村部での人口が12.16万、町での人口が3.12万である。民族構成は、ミャオ族、漢族、水族、トン族、ヤオ族、イ族などの民族集団からなる。ミャオ族の人口は12.87万で、県の総人口の約84.23%を占め、女性の服飾の様式に基づき、スカートの丈の長さで「長裙苗」(自称ムーHmub)と「短裙苗」(自称ガノウGhab Nao)に分けられる。短裙苗と長裙苗の正月にあたる「ノンニエン」(年をくうnongx niangx)は、旧暦の10月の「辰日」或いは「卯日」から三回にわたって毎年違う期日に行われていた[雷山県志編纂委員会編 1992:123]。短裙苗の村落では、旧暦10月第一の辰日を年越しの日とし、更に旧暦11月の第一の辰日、旧暦12月30日(漢族の「春節」、国家の法定の休日に相当する)の三日の日を祭日とした。現在では、ミャオ語で「ニエンゲniangx qend」, 「ノンニエンデヨンniangx hleb」, 「ノンニエンデュウniangx ghangb」と呼ばれ、「頭の年」、「半ばの年」、「尾の年」の意味で、おのおのを重視し互いにずらして行事を行う。一連の行事は、村落社会での父系親族集団の内部の統合を図り、親族集団間と村の間の通婚関係の維持や結合を支える機能を果たしていた。

近年では、町にあたる雷山県城では、正月の「ノンニエン」のうちの「ノンニエンゲ」(頭の年)の期日の前後に、県政府の主催で「苗年文化節」が「民族広場」や街頭、県城の各所を利用した祭事として行われるようになった。日程は、毎年西暦11月11日から20日までの間に設定され、「苗年文化週」と呼ばれて数々の行事が繰り広げられる。この行事は最初は2000年11月に「苗年節」として実施された。中国は2000年を「国際観光年」として、21世紀の新しい門出を意識し、観光客の誘致を目的に政府主催で新たな祭りを創出したのである。雷山県政府は民衆の行事に大々的に介入し、観光開発を行ってブームにしようと試みた<sup>2)</sup>。県政府はこの時には年間の財政収入の10%近い金額を使ったとされ、2001年は財政困難のために行事を中断した。雷山県は国の「西部大開発」という経済発展の戦略の実

施に伴い、「旅遊興県」として、観光開発の政策を定め、再び2002年11月に、「苗年文化節」と名称を変えて行い、これ以後は現在に至るまで毎年実施されている。

既に述べたように、雷山県に住むミャオ族の「ノンニエン」（年をくう）は旧暦の10月の「辰日」あるいは「卯日」から三回にわたって毎年違う期日新暦に行われていた。2002年には、一部の人は、対外的な観光宣伝と観光客誘致の便利を図って、観光の季節に合わせるために西暦で10月1日の「国慶節」から始まる「黄金週」にすべきだと主張し、現地では「民俗に近寄せるか、ゴールデンウィークに近寄せるか」という論争を起こしていた（『貴州日報』2003.2.27）。2002年の「苗年文化節」の終了後、「雷山県苗学会」は、民族習慣を考慮する必要から、1990年から2050年の間の60年間の暦日を調べて、旧暦10月上旬の「卯日」のほぼ半分近くが新暦では11月11日から20日の間に当たるので、「苗年文化節」の期日を毎年のこの時期に定めるべきだと、「民族宗教事務局」と「旅遊事業局」を通して県政府に提言した〔雷山県苗学研究会編 2003: 342-345〕。その後、2003年から「苗年文化節」は、毎年の新暦の11月11日から20日の間に行なわれるようになって、現在まで続いている。「苗年文化節」は、当初は単純に観光客を誘致する目的であったが、次第にミャオ族の文化の展示を利用して、地域経済を活性化する方向へと展開した。行事活動の内容項目は、県城での盛大なパレードと祝賀会、闘牛の会だけでなく、県域内のいくつかの代表的な苗族の村落（西江鎮、郎徳鎮、大塘郷新橋村など）での「ノンニエン」の行事も活動の項目として追加された。また、外国との文化交流が導入されたこともある。期間中には、中国の国内からだけでなく、外国からの観光客も訪れている。この期間中は、雷山県の内外の多くの村落からも、人々は県城に集まってくる。しかし、毎年の村々の「ノンニエン」の開始の日が、従来の旧暦の10月「辰日」や「卯日」から、「苗年文化週」の初日に変わる気配は見られない。村落での「ノンニエン」の行事は従来のままであるが、少しずつ町の行事の影響が浸透して変貌への道をたどり始めている。

## 2. 「苗年文化節」の行事項目

2005年に雷山県で行われた「苗年文化節」での県城と村落での行事の項目とスケジュールを以下に提示した。県城の行事の中には、苗族の代表として新橋村が選ばれて参加している。新橋村は短裙苗の村で、「苗年文化週」の一連の行事では村落活動の拠点の一つとなっており、普段も雷山県の短裙苗の民族風情を展示する観光スポットである。

(1) 雷山県城での行事：2005年11月15日－19日（旧暦10月14日-18日）

- ① 開幕式（パレード、マスゲーム）、11月15日午後2時30分、県城の街、民族広場
- ② 民族の歌と舞踊及び服飾の演出（中国民族博物館民族芸術団、イタリア民間芸術団）、11月15日午後8時30分、民族広場
- ③ ミャオ族の歌の試合、11月16日午後1時30分、民族広場
- ④ 民族の恋歌と銅鼓の演出、11月16日午後8時、民族広場
- ⑤ 雷公山風光の撮影展示、11月14日－19日、民族広場の傍
- ⑥ 「雷公山」を主題とする詩の朗読の競合と、民族歌謡と舞踊の交歓、11月17日午後8時、民族広場
- ⑦ 雷公山登山と原始森林のエコツアー、11月17日－19日、雷公山国家森林公园
- ⑧ 蘆笙、服飾の試合と民族恋歌の対歌の試合、11月16日－19日、民族広場

- ⑨ 闘牛、闘鶏の試合, 11月16日-19日, 郎当河口
  - ⑩ お茶の品質の判定会, 11月16日-19日, 民族広場の傍
  - ⑪ 経済と貿易及び文化の交渉会, 11月15日-19日, 県城
  - ⑫ 貴州省苗学会の主題研究会, 11月17日, 県城
  - ⑬ 有名なカメラメンの撮影と作家のペンクラブの活動, 11月15日-19日, 県城, 雷公山, 西江鎮, 郎德寨
  - ⑭ 中国の民族服飾の展覧会, 11月14日-19日, 民族広場の傍
- (2) 連携する村落での民俗活動: 11月16日-19日
- A 西江鎮<sup>3)</sup>
    - ① 苗年民俗活動, 11月16日午後2時30分, 銅鼓蘆笙場
    - ② 闘鳥, 闘牛の試合, 11月16日-18日, 南貴村 (午前は闘鳥), 平寨河壩 (午後は闘牛)
    - ③ 蘆笙, 服飾, 民族の恋歌の対歌の試合, 11月16日-18日, 千戸苗寨
    - ④ 撮影, ファンクラブの活動, 11月16日-18日, 千戸苗寨
    - ⑤ 中国博物館の除幕儀式, 西江分館成立の交歓会, 西江苗族文化の展示会, 11月17日, 千戸苗寨の寨門, 銅鼓蘆笙場, 文化陳列室
    - ⑥ 刺繍, 銀飾の展示会, 11月17日, 步行街
    - ⑦ 商業と貿易及び投資誘致の活動, 11月17日-19日, 西江鎮政府
  - B 郎德鎮<sup>4)</sup>
    - ① 苗年民俗展示, 11月15日-19日, 郎德上寨の民俗陳列室
    - ② 苗族の歌と舞踊の演出, 11月16日-19日午後2時-4時, 郎德上寨
    - ③ 郎德下寨唐友松苗族渡假山庄の遊楽活動
    - ④ 「掃寨」(チェガン) 儀礼, 11月16日午後, 郎德下寨
  - C 大塘郷新橋村
    - 民族風情の演出, 11月16日午前, 新橋村

以上のように県城だけでなく村落でも多彩な内容の行事が展開し、従来の伝統的な「風俗慣習」がその中に組み込まれ、文化を展示する活動項目になっている状況がわかる。

### 3. 「苗年文化節」の考察

雷山県の「苗年文化節」は、2000年からはじまり、2001年を除いて毎年継続してきた。毎年の行事項目は多少違うが、県城での初日には、村単位で構成した蘆笙隊や短裙苗の独特の服飾を含む民族の盛装をした女性の隊列による行進と、開幕式における民族の歌と舞踊の演出、その後に続く伝統的な闘牛、闘鶏、闘鳥という項目は定番となっている。2005年の「苗年文化週」の期間中に行われた行事項目は、各村落での行事も含めて考えると、表1に提示したように、歌、舞踊、服飾、木鼓、銅鼓、蘆笙、闘牛、闘鳥、刺繍、爬坡(登山)、掃寨(チェガン)など、ミャオ族の文化に関わる項目が選ばれていることがわかる。他方で、開幕式(マスケーム、主席台、「領導」の発言)、パレード、展覧会、交歓会、詩の朗読会、博物館、民俗陳列室、演出会などがあり、ミャオ族の文化項目と言えないものが含まれている。特に開幕式での行事項目は、中国の他地域で政府が主催する運動会や慶祝会などの形式と類似していて、国家の式典項目ともいえる。また、詩の朗読は漢語の文学形式であり、お茶は漢族から導入さ

表1 2005年雷山「苗年文化週」の内容の分類

ミャオ族文化事項	国家的式典と項目	他民族文化事項	経済イベント
歌、舞踊、 木鼓、銅鼓、蘆笙、 闘牛、闘鳥、 服飾、刺繍、 爬坡（登山）、 掃寨（チェガン）	パレード、開幕式（主席台、 「領導」の発言、マスケーム）、 展覧会、交歓会、詩の朗読会 博物館、民俗陳列室、演出会	漢族（詩の朗読、 お茶）、他の少数 民族の文芸、 イタリアの民間 芸術の演出	エコツアー、 お茶品質の 判定会、 経済と貿易の 交渉会

れた産物であることから、漢族の文化事項である。そして、中国の他の少数民族の文芸やイタリアの民間芸術の演出は、ともに他の民族の文化事項に属する。更に、エコツアー、お茶の品質の判定会、経済・貿易の項目の交渉会なども行事項目に入れられ、現地政府の「文化搭台、経貿唱戲」という意図が明白である。「苗年文化週」は、ミャオ族の文化事項を主体としながらも、国家の式典・項目の形式と結合し、経済活動と直接に連携していることを特徴としており、経済と文化が合体している（表1）。

また、村落での行事も、「苗年文化週」で行う行事項目は、通常の苗年の「ノンニエン」とは異なり、政府による文化的構築物である開幕式、経済・貿易の交渉会、ミャオ族の文化事項の展示会と演出会、村落単位の「掃寨」（チェガン）儀礼の展示から構成されている。これら一連の行事からわかるように、国家の行政の主導による活動の展開によって色々な要素が入り込み、もともとは年越しの行事で祖先祭祀や親族集団間の連帯の強調などを目的としていた村での「ノンニエン」が、イベントになってしまった。特に村落での重要な儀礼であった「掃寨」を、「苗年文化週」の行事項目に採用したことは、非常に意味深いことである。「掃寨」の苗語は「チェガン」で、「村を祓う」という意味であり、村の悪鬼のガシャチュウのうち、特に火の精霊の「デオデュウ」を除去する目的で行われてきた。外来の要素を危ういものと見なし、これを除去する儀礼で、毎年旧暦一月の吉日に、村全体を閉鎖して多数の宗教的職能者アシャンが一世帯ずつ火を消していくのである<sup>5)</sup>。アシャンは赤牛あるいは豚と鶏を供犠して儀礼を行い、「デオデュウ」を村から追い祓う。その後で、各家族は新しい火種を取って帰る。また「チェガン」の行事は、火事やほかの災害があった場合、あるいは大型の野獣が村に侵入した時などにも随時に行われる。儀礼の実施にあたっては、村境に目印の記号を施して周囲の人々に知らせ、村人であっても、家への来客であっても村落に入るのを禁じることが、儀礼の特徴の一つである。

「掃寨」の儀礼を「苗年文化週」の村落での行事項目に採用したことで、沢山の観光客が村に入ってくることになり、村人にとっては、「掃寨」の儀礼の意味が変わった。儀礼は「苗年文化週」で展示されたミャオ族の他の行事と同様に、単なる「演出」された儀礼になった。一連の観光活動の一つとして儀礼を鑑賞する現場では、儀礼の主体が多様かつ多層になっている<sup>6)</sup>。「演出」された儀礼では、地方政府、観光客のような「他者」が参加し、多様な言説が展開し、この一連の過程を通して村人は儀礼を再構築して、自分達の村落や集団のあり方を再確認する。観光活動での儀礼の演出に関しては、雷山県西江鎮を1980年代から90年代にかけて調査した人類学者のシェン Scheinが、「伝統に対する一種の捏造と再生産（であり）、……ここで重要なのは、文化が一種の自己意識を露呈しながら、コントロールの対象にもなる」(Schein 2000: 271, 277) と的確に指摘している。「民族文化」としての儀礼の表象は、多様化しねじれつつ文化を再構築するのである。

### Ⅲ. 「民族文化」の動揺と分裂：村落における「ノンニエン」とその変化

黔东南地域での「ノンニエン」（苗年）の由来については、祭事に使う重要な楽器である蘆笙の始まりと結びついた伝説があり、農耕期の終了に伴う年越しの行事で、田圃や水牛に供物を捧げたり、祖先祭祀や結婚式を行うなど、様々の慣習に基づいて行事が行われていた[鈴木・金丸 1985:32-36]。

現在では、雷山県の各地のミャオ族の村落では、「ノンニエン」の行事は国家イデオロギーと観光化の浸透によって大きな変貌を余儀なくされた。元来は月齢に基づく旧暦で農作業に合わせて行われていた儀礼が、イベント化され、「苗年文化週」が太陽暦に基づく西暦の固定した日付に設定されたことによって、従来の「ノンニエン」に関する見方が分裂し、動揺しているように見える。また、観光開発によって地域経済が発展し、市場原理の浸透によって、村落の間や、ミャオ族の下位集団（支系）の間で競争する状況が生まれてきている。例えば、「苗年文化週」に関して、村と町の「苗年」の日付は別にせよという意見がある一方、「苗年文化週」のイベントの行事に選ばれることを積極的に勝ち取り、県の町に集まる動きも出現している。変化の行方は様々であるが、「苗年文化週」の初日を苗年の初めとする意識が村人に定着することはない。このことが最後の防御やこだわりとして残り続けている。

以下では、雷山県地域に住居する「短裙苗」の一般的な「ノンニエン」の行事を紹介して、村落社会における近年の変容を事例ごとに考察する。

#### 1. 「ノンニエン」（苗年）の行事

##### (1) 「ノンニエン」のはじまり

前述したように、短裙苗、つまりガノウウ人の村落では、一般的には、旧暦10月第一の辰日を年越しの日にして、旧暦11月第一の辰日、旧暦12月30日（漢族の「春節」、国家の法定の休日に相当する）の三回にわたり、「ノンニエン」の行事を行うことになっている。この三つの期日は、現地語で「ノンニエンゲ」、「ノンニエンデヨン」、「ノンニエンデュウ」と呼び、それぞれ「頭の年」「半ばの年」「尾の年」（漢語では、「小年」、「大年」、「春節」）の意味である。短裙苗の「ノンニエンゲ」の年越しの日は、旧暦10月第一の辰日（龍の日）であるが、毎年固定しているわけではない。例えば、もし、第一の「辰日」（龍の日）が旧暦の10月5日の前の場合は、月がまだ丸くなっていないので、10月の第二の「辰日」に延期する。もし、第一の「辰日」（龍の日）が旧暦の10月20日の後になる場合は、同じ理由で、次の「辰日」に延期するか、あるいは前の「辰日」にする場合もある。いずれも満月の日を規準にして月の運行にあわせる傾向が見られる<sup>7)</sup>。そして、全ての村が正月の三日間の全てを重視するのではなく、村ごとに異なっており、それぞれ一日を選んで集中的に「ノンニエン」の行事を行う。他の二日間は、別の村に回ったりして過ごしたり、男女の若者はユフォ（遊方）と呼ばれる歌の掛け合いで恋愛する機会となる。

##### (2) 「ノンニエンゲ」（頭の年）の行事の特徴

###### ① 卯の日の晩御飯と「ニャンダイ」

「ノンニエンゲ」（頭の年）の場合、卯の日は、一年間の最後の日として、父方のおばと母方のおじと、両方の従兄弟を家の晩御飯へ招待する。来客は、鶏、鴨、魚、豚肉、糯米ご飯などを贈物としてもって来て、晩御飯の食材にする。姻戚にあたる人々と婚出した女性に関わる人々は、苗語で一律に「シユカ」（酒を飲む客）と呼ばれて客人としてもてなされる。晩御飯の前に、主家は鶏、鴨、魚、豚肉、糯米ご

飯を供えて、酒を地面に少し置き、線香とドォソ（紙銭）を燃やして祖先を呼び、供物を捧げる意を表す。儀礼の手順は、祖先祭祀を意味する「ニャンダイ」と呼ばれる。「ニャンダイ」が終わってから、来客は席について、主家と会食する。

#### ② 辰の日の「チニエン」と「テウンニエン」

翌日の辰の日は、新年の元日にあたる日で、現地語で「チニエン」と呼び、「年の初め」という意味である。この日の早朝には、家の主人が井戸の水汲みを行うが、線香とドォソ（紙銭）をもって行き、その場で燃やして祈願する。朝が明けると、主家は一匹の鶏を供犠して、豚肉、魚、糯米ご飯などを供物にして、家屋の四方、敷居の橋、家畜の小屋、「花樹」などの場所で、線香を燃やしドォソ（紙銭）とともに、供犠した鶏の毛をその場所に貼りつけて、諸精霊や祖先を祀る。朝食の後で、同じ村に住む父方のおじと従兄弟は、お互いをそれぞれに自分の家に招いて食事をする。この慣行は一日中続き、何軒かの家を回って会食し続ける。これを、現地語で「テウンニエン」と呼び、「年を踏む」という意味である。昼間には肉や魚や糯米ご飯などを、村の神樹、家の橋、岩、「涼板橙」<sup>8)</sup>、寨菩薩に供えて祀り、子供の健康の願いをして祖先祭祀をする。この日には、伝統的には、成年の女性は家々を回ることを禁じられているという。

#### ③ 闘牛と蘆笙（銅鼓）踊り

「チニエン」の当日、あるいは翌日の巳の日から、村で午後には水牛による闘牛を行い、その場で蘆笙隊による演奏も同時に行われる。夜は蘆笙踊りや銅鼓踊りがあり、踊りの円の真ん中には男性が入って蘆笙を吹奏しながら足を単調に踏み変えて移動し、外側には刺繍の晴着を着て華麗な銀飾りを頭と胸に身につけて盛装した未婚の女性が先頭になって円を描いて踊る。周囲の村の人達も集まってきて、一緒に踊ったり歌を歌ったりする。その場所は、男女青年が恋愛するユフォ（漢語「遊方」）の機会となる。蘆笙の演奏の選定と蘆笙踊りの手配は、村の「蘆笙頭」が主となって行う。銅鼓をもつ村の場合には、銅鼓の家の主人は、銅鼓と豚肉、魚、糯米ご飯を持って、村の鼓坪にきて、銅鼓を置いて線香とドォソを燃やして「醒鼓」の手順をする。そうすると、銅鼓を使えるようになり、銅鼓と蘆笙の演奏のリズムにあわせて女性たちが踊る。

#### ④ チリーの日

「チニエン」の日から五日後、各家は、吉日を選んで牛糞を少量とって箕にのせて、塩、唐辛子、ご飯、酒などを持って田圃にいき、線香とドォソを燃やして三本の茅草を田圃の地面に挿して田圃の神を祀り、新しい年に稲の苗が順調に稔るように願って祈念する。これを、現地語で「チリー」と呼び<sup>9)</sup>、「土の始まり」という意味である。

#### (3) 「ノンニエンデヨン」を重視する村

従来から、「ノンニエンデヨン」（「半ばの年」、「大年」）を重視する村は最も多く、行事も最も盛大であるという。家では、精霊と祖先の祭祀を行い、「シユカ」（姻戚や婚出した女性の俗称）や父系リネージ(lineage)集団である「ゼ」<sup>10)</sup>の成員を招いて招待する。一般的に、「ノンニエンデヨン」の日には、糯米を蒸してから杵と臼を使って搗いて餅を作る。餅は、当日の食材にし、来客への返礼にも使う。「ノンニエン」（苗年）の期間中は、結婚の季節として、嫁にやるときに餅を持っていかせたりするので、餅をよく使う。村での「ノンニエンデヨン」の行事は、基本的に「ノンニエンゲ」と同様に、祖先祭祀の「ニャンダイ」や、闘牛や蘆笙（銅鼓）踊りなどを行なって、親族集団や村落の間の連帯を強化する。

以上、村落での「ノンニエン」の概略からわかるように、この行事は年越しであり、神々や精霊へ祈

願して収穫に感謝して翌年の豊作を願う。そして、親族同士が訪問しあって親睦を深めて相互の関係を強固にし、若い男女は歌や踊りを通じて知り合って恋愛をして、結婚への道筋をつける機会として重要であった。

## 2. 近年の変化

### (1) 行事の時間認識に関する動揺

近年において、村落の「ノンニエン」は急速に変貌を遂げつつある。特に2003年以降は、毎年、地域の経済発展と民族文化の展示という目的で県政府による「苗年文化節」が11月に行われることになり、その際に、県域では各民族集団と民族下部集団（支系）から選ばれた村人の代表が参加して、盛大なパレードと祝賀会、そして闘牛の会が開催されることになった。そのため、多くの村落から人々が県域に集まってくるので、事実上、これが毎年のノンニエンの開始となる傾向が見られるようになった。また、短裙苗はミャオ族の中の下部集団（支系）であり、その文化の特徴を代表として反映することが要請され、更に県政府による一部の観光のイベントには村落の行事も含まれるなど、従来にない形の「ノンニエン」が行われることになった。その結果、「ノンニエン」の期間を、村によっては、旧暦10月ではなく旧暦正月15日（漢族の「元宵節」）に延期して行う所も現われた。

### (2) 祖先祭祀の変容

現在では、ガノウ人の村の場合では、「ノンニエン」の期間中に、共同の祖先を祭祀する大きな行事を見ることはできない。しかし、これとは別に、「ニャンダイ」や「ハデュ」（敬橋。橋を祀る）などの個別の行事で、家族の祖先や、リネージである「ゼ」の祖先を祀ることは、重要な行事として行われている。また、父系リネージの「ゼ」の単位で寨（村落）の菩薩を祀る時には、職能者アシャンを依頼して行い、その時に唱えられる呪文の中には、祖先の「ガョユ」<sup>11)</sup>を呼び出して供物を捧げる言葉が含まれている。また、一部の地域で最近では漠然たる祖先ではなく、蚩尤をミャオ族の共通の祖先として祀る傾向があらわれている。古代中国の神話によれば、蚩尤は黄帝と戦って負けたが、この戦いは漢族対非漢族と解釈され、敗者で非漢族の代表の蚩尤の子孫がミャオ族となったと考えて、自分達の祖先を蚩尤に遡る説がある。これは特に1990年代半ば以降の動きで、中華民族多元一体論の言説が広まることに対応して自らの独自性を主張する試みで、漢族に対するミャオ族のエスニック・アイデンティティの再構築運動に関わると考えられる。ただし、「ノンニエン」には元来から、年越しの行事と祖先祭祀の意味が含まれていたのであり、これに様々の再解釈が施されたのだと言える。

### (3) イベント化への傾向

「ノンニエン」では祖先祭祀に関する様々な変化が生じただけでなく、行政の参入や流行文化の影響が現われている。行事の項目に、バスケットボールの試合や村民の芸能演出会、伝統的な闘牛や闘鶏や蘆笙踊りの行事、「民族文化」としての刺繍などの技術の展示（従来の内部向けの誇示の意味と違う）が加わるなど、新旧入り乱れたモザイクのような文化項目が配置され、その中から更に新たな変化が見られるようになった。

以下の表2は、2007年12月下旬「ノンニエンデヨン」の期間中にYG村の「苗年節組織委員会」によって行なわれた「活動項目」の日程である。「活動」は、雷山県の苗年節の文化活動の一環として行なわれ、村落での行事の展示であった。

表2 YG村における「ノンニエンデヨン」(大年) 期間の「活動項目」

日期 (西暦)	活 動 項 目	時 刻
12月25日	苗年節開幕儀式 個人の蘆笙演出の試合 演劇小品の演出の試合 集団の蘆笙演出の試合	午後1時-3時 3時-4時 4時-5時 5時以後
12月26日	男子、女子の長距離競走 女子の刺繍の試合 歌謡の試合 昔話	午後0時-2時 2時-3時 3時-4時 4時-5時
12月27日	女子の着装、髻の試合 蘆笙踊りの試合 簫の笛の演奏試合 表彰式 蘆笙の演出と表彰式	午前10時-11時 11時-12時 午後0時-1時 1時-2時 2時-5時
12月28日	蘆笙踊り 村民の芸能演出	午後 夜

#### (4) 権力体系における伝統的な役目の位置付けの変化

村落で「ノンニエン」の行事を主宰するのは、従来は主として「ルガン」(寨老)<sup>12)</sup>と蘆笙頭<sup>13)</sup>であり、この二人が手配していた。「ルガン」は、村での祭祀・儀礼の手配や民事の紛争の仲裁などの役として継続されていて、一般的には村民委員会によって、村での各分節リネージの「ゼ」(大房)あるいは「イジェゼ」(小房)から一人が指定される。村民委員会と村民会議の下で、婦人・治安など色々な機能を果たす団体と役職が設置されている。「ルガン」は、国家の法律・行政政策と伝統な慣習の中間にあって行政との折衝役を果たしてきたが、村民委員会の下に置かれて、伝統的役割は弱体化してきたといえる。

現在では、「ノンニエン」は、行政管理の下で<sup>14)</sup>共青团などが参入して構成する「苗年節組織委員会」や「苗年節青年組織委員会」などの臨時の組織が催すように変化してきている。しかし、行事の期間中、村での伝統的役職の働きは欠かすことができない。行政管理による行事の様々な手配は、「ルガン」や蘆笙頭などを経由して成立するのが一般的である。以下の図1では、苗年の行事における伝統的権力体系の位置付けを示した。共産党の政治組織の下に、伝統的役職は位置付けられて管理下に置かれるように設定されている。一見すると政府権力が末端までスムーズに到達する構図をとっているが、伝統的役職を完全には消滅させておらず、微妙に温存し続けることで、自らの社会の独自性を誇示する一方で、共産党権力との巧みな棲み分けを行っているように見える。

### 3. 考察

村落社会での「ノンニエン」の行事は、祖先祭祀や闘牛や蘆笙(銅鼓)踊りなどを中心として、各村が三回の祝祭日をそれぞれ独自に重視して、相互に日程をずらして行事を行う。それによって人々は村落の間を移動するので各家族の往来が可能となり、通婚集団同士の交流が活発になる。更に、村落での行事の主要内容の一つとなっている闘牛や蘆笙(銅鼓)踊りなどの行事を通して、異なる村から訪れる

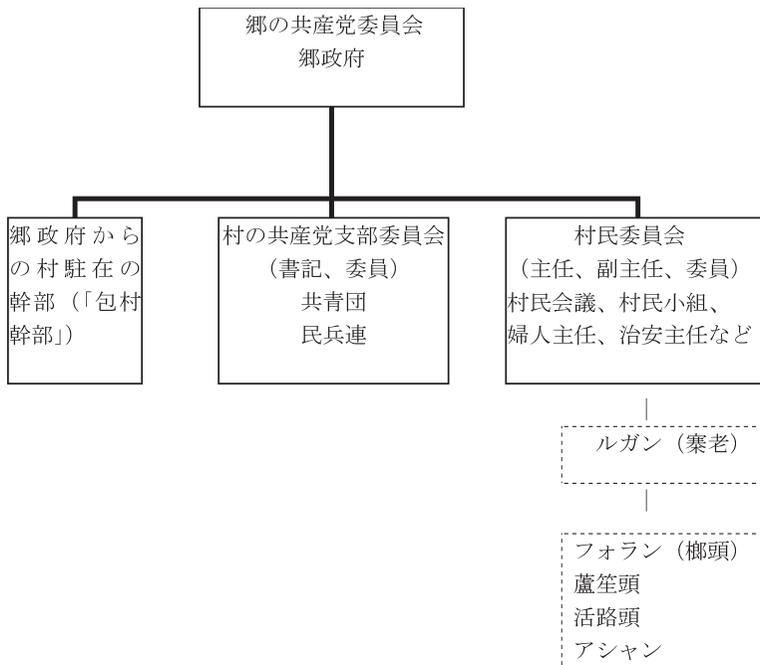


図1 苗年の行事にみる伝統的権力体系の位置付け

男女の若者に恋愛のユフォ（歌掛けによる交流）の機会を与えることで、男女が知り合い、結果的に伝統的な通婚集団間のつながりを持続させて、地域での村と村の連帯の秩序が構築されることになる。つまり、「ノンニェン」の行事によって、父系の親族集団の内部の統合と、親族集団間と村落の間の通婚関係の維持を達成し、血縁と地縁を支える。しかし、市場経済に傾いた「苗年文化節」によって町に集中して行われる行事は、村落社会での行事体系に動揺を引き起こし、親族集団の間や各村落や民族集団（民族下部集団も含む）などの社会連帯を弱体化させる一方で、競争や分裂など新たな関係を生じさせた。改革開放政策が浸透してきた1980年代には、各村落では祭祀や儀礼が復活し盛り上がりを見せてきたが、1990年代には出稼ぎが広まって社会経済の変動が引き起こされ、村落の過疎化が進んで人口が減少し、村落の儀礼は衰退する傾向が現われてきた。2000年代には、国家行政が地域への財政援助を行って、行事の規模を拡大し、流行娯楽様式を導入して、行事の吸引力を向上させ、従来の通婚圏内の親族集団や村落間の交流を活発化させる試みが導入された。この施策は、いわゆる地域の振興事業につながると認識されていたが、その目的はうまく達成されたとは言い難い。

「ノンニェン」の行事では、国家の資源に関して優先権をもつ行政組織は、従来の伝統的な役職にある者（ルガン、フォラン、アシヤンなど）よりも、儀礼の運営や行事の項目などの執行に関して、圧倒的な発言力を持つ。イベント化された開幕式での行政の官員の発言では、行事に関して従来の伝統的な意味を説くことはなく、各民族の団結や「民族文化」の保護や、儀礼の観光開発の意義などを説き、国家イデオロギーを表出する場となる。また、従来の行事では行われなかった男子と女子の長距離競走や、村民による演劇小品などの芸能の演出といった行事項目は、中国の他の地域での「運動会」や「文芸晚会」のイベントの様式を想起させる。このように、「ノンニェン」の行事に新たな意味が付加され

た。

国家イデオロギーが村落の儀礼や行事に浸透し、流用されていく現状に対して引き起こされた村人の反応は非常に意味深い。村人のうち、文化大革命の時期に抑圧された宗教的職能者アシャンと「ルガン」(寨老)は、最初は懐疑的であったが、徐々に協力するようになった者がおり、積極的に参与する者もあるられるなど幅広い動きが見られた。その理由は、国家行政の援助によって、中国の政治環境の中で、祭祀などの儀礼や行事に対して、一定の合法性や正当性が付与されるからである。もちろん、儀礼や行事における国家行政の要素の参入は、村落の行事自体を従来の形式とは異なる形に変容させる側面があり、村人にとっては、行事の現場での要望や行事に対する認識及び情感の満足に関して変化を生じさせて、伝統的な儀礼や行事とは異質な部分が際立つことになる。近代化に伴う変容の中で、村落での儀礼や行事、つまり行政側によって民俗として把握された要素や、「民族文化」の伝統的と見なされた要素は、国家政策に遭遇して、従属的な性質を与えられることになったと考えられる。

#### IV. 結びにかえて

このように「苗年文化節」は、市場経済化の深化に伴う国家の開発戦略によって、地域の振興を目的とする観光開発の一環として、行事の時間から項目まで一括して管理して構築され、その中に「民族文化」として選定した項目に儀礼なども含み込んだ文化事項を設定し、地方行政が文化要素を転用 (displacement)、流用 (appropriation)、借用 (borrowing) する一大イベントを創出した。その結果、この行事に参与し、動揺ないし競争し合う主体が、それぞれに「文化」を「展示」(display) し「演出」(demonstration) することで、「民族文化」や「地域文化」が創造され、様々な表象作用を通じて新たな文化形式を生成しつつある。そして、国家行政が主導する観光開発は、村落の「苗年」の行事に大きな影響を及ぼして、村落の伝統的権力系統を通して直接に行事へ参入したり、市場経済化の流れの中で、「民族文化」として儀礼を顕在化させたり調整したりしている。村落社会では、国家イデオロギーと「民族文化」の折衝・交渉する場が、新たに生成されていると考えられる。一方、観光開発による経済的効果<sup>15)</sup>が主に観光スポットとなった町やいくつかの有力な村落に集中しているため、従来の村落と町との間における格差を拡大させ、従属的な関係性を深刻化させるなどの諸問題が起こって来ている。観光開発に結び付いた「民族文化」の分布の不均衡な状態が顕在化する中で、「民族文化」は誰のものが問われているのである。

#### 謝辞

本稿の執筆に際しては、国立民族博物館の佐々木史郎教授、関雄二教授からの確で有益な助言を頂いた。また、最後の成稿にあたって、慶應義塾大学の鈴木正崇先生から指導を得たここに記して感謝したい。

#### 参考文献

- 鈴木正崇 1999「祖先祭祀の変容—中国貴州省苗族の鼓社節の場合—」宮家準編『民俗宗教の地平』春秋社。  
鈴木正崇 2004「女神信仰の現代の変容—中国貴州省侗族の薩媽節をめぐって—」野村伸一編『東アジアの女神信仰と女性生活』慶應義塾大学出版会。  
鈴木正崇・金丸良子 1985『西南中国の少数民族—貴州省苗族民俗誌—』古今書院。

- 曾 士才 1998 「中国のエスニック・ツーリズム—少数民族の若者たちと民族文化」『中国21』Vol. 3 (愛知大学現代中国学会).
- 曾 士才 2001 「中国における民族観光の創出—貴州省の事例から—」『民族学研究』第66巻1号, 日本民族学会.
- 曾 士才 2002 「中国における少数民族の“観光出稼ぎ”と村の変貌」吉原和男・鈴木正崇編『拡大する中国世界と文化創造—アジア太平洋の底流—』弘文堂.
- 塚田誠之編 2008 『民族表象のポリテクス—中国南部における人類学・歴史学的研究—』風響社.
- 陶 治 2004 「ミャオ族村落社会における二種類の宗教的職能者—中国貴州省東南部雷山県の事例—」『人間と社会の探求 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第59号.
- 陶 治 2006 「歴史の中の親族と儀礼—中国貴州省東南部ミャオ族の支系『ガノウ』人の祖先祭祀をめぐって—」『人間と社会の探求 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第62号.
- 雷山県志編纂委員会編 1992 『雷山県志』貴州人民出版社.
- 雷山県苗学研究会編 2003 『雷山苗学研究文集 第一集』.
- 李 國章 2006 『雷公山苗族傳統文化』貴州民族出版社.
- 呉一文他 2000 『苗族古歌与苗族历史文化』貴州省民族出版社.
- Schein, Louisa 2000 *Minority Rules: the Miao and the Feminine in China's Cultural Politics*, Duck University Press.
- Wood, R.E. 1984 'Ethnic Tourism, the State, and Cultural Change in Southeast Asia.' *Annals of Tourism Research* 11: 353-374.

## 注

- 1) 「改革開放」政策を実施して以来、拡大してきた中国の東部と西部の経済発展の格差問題を解決するため、1999年の末から中国政府は西部の経済発展を優先させる戦略的政策を提出した。
- 2) 2000年より始まった貴州省黔東南地域における官民による観光開発の動きについては、[曾士才2001, 2002], [鈴木正崇2004] などのように、色々な角度からとらえる研究を参照されたい。
- 3) 「千戸苗寨」と呼ばれる長裙苗の村である。貴州省政府によって、村落のうち最も早く、1982年に観光スポットのミャオ族の自然村に指定され、1992年には「歴史文化名鎮」となり、1999年から貴州省の13ヶ所の重点となる民族の村落の一つとされ、2001年には雷山県政府によって観光開発の重点の一つに確定された [雷山県苗学研究会編2003]。近年では、観光事業の発達に伴い、県の町に繋がる道路が整備され、村内には町のような施設が整備されてきた。
- 4) 長裙苗の村で600年の歴史があるという。1985年から観光スポットとして開放されて以来、順調に発展を遂げ、1993年には「中国博物館誌」に登載され、1995年に中国国家文化省と貴州省文化庁にそれぞれ「中国民間芸術之郷」、「民族歌舞之郷」と命名された。1998年には中国国家文物局によって「全国百座特色博物館」の一つと認定され、2001年に「全国重点文物保护单位」(国の重要な文化財)に登録された [雷山県苗学研究会編2003]。
- 5) 村落社会における職能者アシャンについては、[陶2004]を参照のこと。
- 6) 塚田誠之と韓敏は、中国での経済のグローバリゼーションに伴い観光開発を、「民族表象のポリテクス」という枠組みで把握し、表象の現場における行為の主体の多様性に注目した [塚田編2008, 韓敏 2008: 255-262]。ここでは、儀礼や行事の現場に関わる、儀礼の構築の主体に注目して分析する。
- 7) 黔東南地域のミャオ族が旧暦の10月を年の始まりとする暦法については、色々な説明がある。この方式は古代の秦、楚、漢の暦法と同様に、ミャオ族の共同の祖先である蚩尤が属していたとされる「東夷」との関係が深く、周暦の遺留ではないかという説がある [呉一文 2000: 295-296]。古代との連続性の主張である。一方、雷山県の長裙苗の学者である李国章は、ミャオ族のノンニエンは、人間始祖の姜央の妻「ヤンニ」(人間の女性始祖の汎称)を祀ったことに起源があり、祖先の蚩尤は戦闘に敗北して捕虜され、10月の卯(兎)の日に殺されたので、その日を年末にして、12年ごとに行う大規模な祖先祭祀の「ノンニョ」(鼓社節)と同様に祖先の蚩尤を祀るとしている [李国章 2006: 158-159]。しかし、ミャオ族の始祖を蚩尤とする説は1990年代の半ばに創られた伝承でそのままでは受け入れられない。
- 8) 黔東南地域で、山道の脇の大樹の下に置いて人々が休憩を取るための椅子を指す。橋の形とするその椅子の作成と奉納は、人々の子授けなどを求める功德の一つであり、特定の家族などの村人よる祭る場所にもなる。

- 9) 春に「活路頭」と呼ばれる草分け筋の家が、農作業を開始する行事と類似するが、意味は異なる。
- 10) ガノウ人のリネージ「ゼ」については、[陶2006]を参照のこと。
- 11) 蚩尤と見なされることもある。
- 12) 村での祭祀儀礼の手配や民事の紛争の仲裁などの伝統的な役目である。
- 13) 雷山県の長裙苗の村落での「蘆笙頭」に関連する状況は、[鈴木・金丸1985:167-168]を参照。
- 14) 村落での正式な管理組織は、「両委」（共産党支部委員会と村民委員会）が主体で、村民会議、共青团、婦人会、民兵連などが設置されている。行政村は地域の状況に応じていくつかの「村民小組」に分けられる。共産党の支部委員会は、村の共産党員によって選ばれた書記1人、副書記1人、委員3-5人の役職からなり、村民委員会は、主任（村長）1人、副主任（副村長）1人、委員3-5人で設置される。村民委員会の下部組織の村民小組の組長は1人で、村民委員会が指名する。村民委員会と村民会議の下に、婦人・治安などの団体と役職が置かれ、「ルガン」（寨老）はその下である。「ルガン」はかつては大きな権威と権力を持っていた。また、「フォラン」（榔頭）という役職があり、紛争の仲裁人としての役割を果たし、「ルガン」の中の一人が兼任することが多い。そして、村では職能者アシャンと「蘆笙頭」は、おのおのが家族の儀礼と村の儀礼を受け持つ役目だけを果たしている。前述したように、職能者アシャンは、精霊や霊界との媒介役として儀礼に携わるが、アシャンが村落の儀礼・行事に参加するからといって、村落の公共事務上で権威を持つとは言いがたい。蘆笙はミャオ族の儀礼で使用する楽器として重要で、「蘆笙頭」は、村の蘆笙の演奏隊を組織し、葬送儀礼や「吃新節」（ノンモォ）や苗年（ノンニエン）などの行事で蘆笙の演奏を手配し、村社会では一定の権威を持つ。「活路頭」は、一年の農事を始める象徴的役割を果たしており、村の管理事務からは完全に離れたが、一般には村の草分け筋の親族集団の「ゼ」から出るため、村社会では一定の発言力をもつと思われる。
- 15) 雷山県は、中国政府が貧困脱出のための開発を援助する重点な拠点地域とされた。統計によれば、2008年には、国民総生産の総額は6億元に達し、そのうち年間103万の観光客を接待した観光業は、2億元の関連収入を実現したとされる（雷山県政府公式サイトを参照）<http://www.qdn.gov.cn/cms/cms/website/lxxzf/jsp/page.jsp?channelId=4438&infoId=2009074260>